新刊紹介

和書

ユージン・ローガン（白須英子 訳）
『アラブ五〇〇年史―オスマン帝国支配から「アラブ革命」まで』〈上〉〈下〉
白水社、二〇一三年

杉本　悠子
早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

本書は、一五一六―一五一七年にかけてのオスマン帝国によるアラブ地域の征服に始まり、二〇〇九年にG・W・ブッシュ米大統領が退任するまでの約五〇〇年にわたるアラブ史を広く概観するものである。原著（二〇〇九年初版）の本文はアラブ世界の前向きな変化を予感させる政治的な動きに言及して終わっているが、二〇一一年にアラブの国々で「アラブの春」と呼ばれる大きな政治動乱が激化する中、一部加筆修正され、エピローグの後に「追記―アラブの春から一年」が書き加えられた。著者は、アラブ地域における近代の始まりをオスマン帝国による侵攻ととらえ、以降のアラブの歴史をオスマン帝国時代、ヨーロッパ植民地時代、冷戦時代、アメリカ支配とグローバル化時代とに大別して論じ、東はアラビア半島から西はモロッコに至るアラブ地域が、それぞれ地理的・政治的には多様な環境下にあって言語や歴史を紐帯として帰属意識を共有し、時に相互に影響を与え合った過程を描き出した。

年代記に加えて、市井の人々の日記、パレスチナの闘士の手記、外交官やアナリスト、政治家の回想録等アラブ人の手による一次史料を非常に重視していることも本書の特徴の一つである。外国人ではなく、同時代のアラブ人の目から見たアラブの歴史がどのようなものであるかを西欧の読者に伝えることが、著者の希望であった。著者はアラブ人に対しては、彼らの停滞は彼ら自身に原因があり、経済成長や人権の尊重といったよりよい未来にためには彼らがイニシアティブをとらねばならないと指摘する一方で、西欧の人々に対しては、アラブ人は彼らと同じように近代史の普遍的な諸問題を経験しており、テロの脅威はアラブの歴史と直接関連があるために、彼らがアラブの歴史に無関心でいることは許されない、と訴えた。

唯一残念なことに、訳文の固有名詞の表記方法には再考の余地があるように思われる。訳者あとがきから、翻訳者・編集者による人名の日本語表記上の苦心の様子が窺えるが、日本における当該地域の歴史・言語の専門家に助言を仰ぐ等して、この点が改善されると本書の有用性もより高まるのではないだろうか。

間野英二
『バーブル―ムガル帝国の創設者』
（世界史リブレット人）
山川出版社、二〇一三年

西村　淳一
早稲田大学イスラーム地域研究機構
主任研究員

山川出版社「世界史リブレット人」シリーズの刊行が二〇一三年から始まった。先行する「世界史リブレット」シリーズのスタイルを踏襲しつつ、歴史上の重要人物を採り上げて比較的短い分量で一般向けにわかりやすく解説するというもので、全一〇〇巻で構成される予定である。単にある人物の伝記を紹介するだけにとどまらず、時代背景の説明や最新の研究成果を織り込むなど、一般読者のみならず研究者の目から見ても面白くかつ有用な内容となっている。ラインナップを見ると、イスラーム史に直接関わる巻が二三あり――加藤博『ムハンマド・アリー』、家島彦一『イブン・ジュバイルとイブン・バットゥー

タ』は既刊――、今後の展開が楽しみである。

当該の『バーブル』は上記シリーズの第〇四六巻として刊行された。本書の主人公バーブル（一五三〇没）はティムール朝（一三七〇―一五〇七）の王子にしてムガル朝（一五二六―一八五八）の創設者であり、チャガタイ・テュルク語による回想録『バーブル・ナーマ』を執筆した文人としても知られる、中央アジアおよび南アジア・イスラーム史上の重要人物である。にもかかわらず日本においてその知名度は決して高くなく、それゆえ本書の一般向け啓蒙書としての価値は高い。著者の間野英二氏は世界各地で上記回想録の写本を蒐集し、その一言一句にこだわって研究、校訂、邦訳した当代きってのバーブル通である。そのような氏ならではの詳細な解説が本書のいたるところに見られ、一般向けのレヴェルを越えた質の高さを与えている。と同時にその行間からは氏のバーブルへの愛がひしひしと感じられ、彼の魅力を説くその熱い語り口はまるで彼に宛てたファンレターのようですらある。それでいて簡潔明瞭を旨とした彼に倣うように、氏の文章は非常に簡明で、とにかく読みやすい。まさに本書は、新シリーズを飾るに相応しい、最適な著者を得た珠玉の一冊である。

なお現在、間野氏による『バーブル・ナーマ』の邦訳（松香堂、一九九八年）は絶版となっており、これは日本のイスラーム史研究・教育にとって大変に勿体ない、残念な事態である。本書の出版を機に、より一般の読者が目にしやすい形での再版が切に望まれる。

志茂碩敏
『モンゴル帝国史研究　正篇―中央ユーラシア遊牧諸政権の国家構造』
東京大学出版会、二〇一三年

高木　小苗
早稲田大学文化構想学部多元文化論系
助手

本書は、志茂氏の前著『モンゴル帝国史研究序説』（東京大学出版会、一九九五年）に続き、著者の長年にわたるモンゴル帝国史研究の集大成として、出版された。前著において、著者は、モンゴル帝国皇帝ハーンが西アジアに配置した二つの駐屯軍とイル・ハーン朝のモンゴル諸部族、チンギス・ハーンの一門に仕える御家人amīrに関する膨大な情報を整理した。またペルシア語の単語buzurgが、『集史』などの同時代のペルシア語史料において、チンギス・ハーンあるいは彼の諸子弟の家系に仕える御家人のように、一門に関係する人物および事物を指す名詞に付され、漢語史料の「大」に相当する意味で用いられていることを明らかにした。

本書の冒頭の「眼目」と「序章」において、著者は、前著の考察にもとづき、まず、先述のbuzurgがモンゴル語のyekeの訳語であることを指摘している。また『集史』第一巻「モンゴル史」の成立経緯について、イル・ハーン朝の七代君主ガザンが、国の崩壊の危機に面し、チンギス一門および諸部族の将兵の系譜と歴史である『モンゴル史』の編纂により、諸部族の統合を目指したこと、さらに次のオルジェイトゥ治世に、この『モンゴル史』に補足や修正が施され、『集史』「モンゴル史」に改編されたことが述べられる。続けて、著者は、本書第一部において、『集史』イスタンブル写本は『モンゴル史』を書写した写本であり、一方、『集史』「モンゴル史」は、『モンゴル史』の記述の一部が削除されて形成され、その削除版を書写しているのが、テヘラン写本であるという見解にもとづき、両写本をはじめとする関連諸写本の記述を対照している。そして第二部では、前著においてイル・ハーン朝で活動した御家人に焦点があてられたのに対し、チンギス一門の各王家に仕える諸部族の御家人一門の情報が整理される。

本書と前著により、『集史』写本間の記述の異同、そして同時代の代表的なペルシア語史書に見られるモンゴル帝国の諸部族と御家人の家系の膨大な情報を容易に総覧し、検索することができるようになった価値は極めて大きく、著者に対する深い敬意を感じてやまない。ただ惜しむらくは、著者は、第一部で展開している『モンゴル

史』の記述が削除されて『集史』「モンゴル史」が形成されたという説に対して、前者が増補されて後者が成立したという説が存在することに言及していない。また第二部を通して、チンギス一門の各王族に仕えた個々の御家人の家系と各御家人が所属したチンギス・ハーンの千戸の情報が整理されているにもかかわらず、第二部のまとめでは、それらの情報が出身部族別に集約され、所属千戸は考察の対象とされていない。今後、東西の多言語史料にもとづき、本書の情報がさらに補充されていくことが求められる。

川本正知
『モンゴル帝国の軍隊と戦争』
山川出版社、二〇一三年

野田　仁
早稲田大学イスラーム地域研究機構
次席研究員／研究院講師

中央アジアのスーフィズムを専門としてきた著者によるモンゴル帝国史の再検討が本書の特色である。著者も自ら述べるように、新しい史料や新しい知見に基づくというより、これまでに蓄積されてきた情報を整理し直し、新しい像を示す内容になっており、この叙述方法そのものがモンゴル帝国研究にとって「新しい」アプローチではないかと思われる。言うまでも無く、モンゴル帝国史研究は、ラシード・ウッディーンの史書をはじめとするペルシャ語史料に多くを拠っており、著者のペルシャ語史料についての豊かな知識は不可欠であったはずである。

本書のタイトルには「戦争」とあるが、むしろ軍隊の組織方法・編成の観点からモンゴル帝国の総体を見るものと言えよう。その点で、少し前に刊行された志茂碩敏氏の著作（本欄でも別に紹介される）と議論を共有できる所もある。

第Ⅰ部「大モンゴル・ウルスの形成とその構造」でキーワードとなるのは、遊牧集団を構成する「部族」であり、人口調査に基づき、部族を再編成する過程を丹念に追っている。戦争に多く言及する第三章は、部族から徴発された混成軍であるタンマ軍の分析を中心とし、軍隊構成の観点から改めてイル・ハン国の立場を論じており興味深い。

第Ⅱ部が主題とする定住民支配でも、やはり人口調査と徴税が問題となる。人口の調査と戸籍登録によりモンゴルの十進法軍隊編成を定住民社会に適応し、民の分配・徴発が可能になったからである。このようにモンゴルにおける遊牧民的社会編成が大モンゴル・ウルスに組み込まれた定住民社会にも「押しつけられた」ことこそが、著者が強調するモンゴル帝国の特質である。遊牧社会の研究にとっても重要な視点を提示する本書の刊行により、モンゴル帝国史研究におけるさらなる活発な議論を期待したい。

菊田悠
『ウズベキスタンの聖者崇敬―陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』
風響社、二〇一三年

宗野　ふもと
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程

ウズベキスタンでは、イスラーム革命などのアラブ地域におけるイスラームの政治化は今日、目立って起きていない。しかし、ペレストロイカ末期から、断食や礼拝を行う人の増加など、草の根レベルの再イスラーム化が起きている。ウズベキスタンにおける再イスラーム化とソヴィエト近代化との関わりを、聖者崇敬を通して人類学的視点から分析しているのが本書である。

著者は、フェルガナ盆地の田舎町、リシトンの主要産業、陶業における陶工たちのイスラーム的守護聖者崇敬に注目をする。無神論が公的イデオロギーに掲げられていたソ連時代、イスラームは、政府の監視、

取り締まりの対象となってきた。しかし、こうした状況でも聖者崇敬は廃れることはなかった。それはいかに可能であったかを、長期にわたる現地調査をベースに詳細に描き出している。

ウズベキスタンでは、各職能集団にはピールと呼ばれる守護聖者がいる。リシトンの陶業のピールはナクシュバンドとアミール・クラールであるといわれている。二〇世紀初頭、陶工たちは、ピールにまつわる集会や儀礼を行い、各工房での礼儀作法や禁忌にもピールは関わっていた。ソ連時代の集団化によって、生産の場は個人の工房から国営工場に変化したが、ピール崇敬は継続された。国営工場での生産体制のある程度は、前代の個人工房の集まりからなる同業者組合によっていた。生産の場が一つにまとめられたことで、工房の秩序を保つピール崇敬の機能は衰退し、個人の信条としてピール崇敬は継続されるようになった。そして、ピール崇敬にまつわる信仰実践を通じてイスラームは維持されたのである。ソヴィエト近代化は、逆説的に、思想的近代化と信仰実践の両立をもたらすものであったと著者は論じる。

近代化と宗教の関係について、本書は人々の信仰実践を取り上げて、宗教は、変わりゆく現代社会と人々の生活に適応しうるものであることを、通時的かつ共時的に描き論じ上げた一冊である。

アブデュルレシト・イブラヒム（小松香織・小松久男訳）『ジャポンヤ―イブラヒムの明治日本探訪記』（イスラーム原典叢書）岩波書店、二〇一三年

山﨑　典子
東京大学大学院総合文化研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員（DC）

本書は、ロシアのタタール人ウラマー（学識者）、ジャーナリスト、旅行家であり、東京モスクの初代イマーム（指導者）として第二次世界大戦時における日本の対イスラーム工作に関与したことでも知られるアブデュルレシト・イブラヒム（一八五七―一九四四）のオスマン語ユーラシア旅行記『イスラーム世界――日本におけるイスラームの普及』（イスタンブル、一九一〇年）から、日本滞在記の部分を中心に訳出したものである。

同著の邦訳には、同じ訳者による『ジャポンヤ――イスラム系ロシア人の見た明治日本』（第三書館、一九九一年）があった。今回、増補・改訂が行われた本書では、「イスラームと中央ユーラシアそして日本を結んで一つのグローバルヒストリーを構想する上で、興味深い糸口を提供しているように思われる」イブラヒムの思想と行動（五一三頁）が、旧版にも増して立体的に示されている。たとえば、帝政ロシアにおいてムスリムの政治運動を組織していたイブラヒムが、一九〇七年末、中央アジア諸都市をめぐる旅に出た経緯や、離日後に訪れた朝鮮や中国における旅行の概要が明らかになった。このことにより、一九〇九年二月から六月までのあいだ滞在した日本における彼の活動や体験が、新たに挿入された関連資料の効果と相まって、より一層引き立っているのである。

さて、本書によれば、明治日本社会をつぶさに観察したイブラヒムは、日本の文化や教育、軍事、政治、さらには日本人の性質や風俗習慣、宗教信仰についての記録を残した。また、伊藤博文や大隈重信をはじめとする各界の要人と交流し、頭山満率いるアジア主義団体「亜細亜義会」の設立発起人にも名を連ねたという。それは、彼が、日露戦争で強国ロシアを打ち負かしたアジアの新星・日本の支援を得て、ヨーロッパ列強の支配に苦しむイスラーム世界を救うという構想を抱いていたからに他ならない。ムスリムの明治日本見聞録として名高い原著の魅力を余すことなく伝えてくれる本書は、日本の読者が、日本とイスラーム世界の関係をユーラシア史、ひいては世界史的文脈から考える視点を養う際、一つの重要な道標となるに違いない。

中西竜也
『中華と対話するイスラーム―一七―一九世紀中国ムスリムの思想的営為』
京都大学学術出版会、二〇一三年

山﨑　典子
東京大学大学院総合文化研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員（DC）

本書は、現在も中国本土に暮らす漢語を日常的に話すムスリムたちが一七―一九世紀に実践してきた、中華文明とイスラーム文明の対話の諸相を、「中国的」イスラームの思想史的展開を中心として解明した力作である。

本書の魅力は、第一に、漢語、アラビア語やペルシア語をはじめとする多言語原典史料の綿密な解読成果に依拠しながらも、狭隘な専門的議論に陥ることなく、「文明間対話」や「多文化共生」という著者の明確な問題意識と遠大な視野が貫徹されているという点にある。具体的に言えば、中国ムスリムによるイスラームの「漢訳」やペルシア語文化受容、西北部のスーフィズムや雲南ムスリムのイスラーム法解釈についての事例は、イスラーム文明と中国伝統思想の狭間に立ち、マイノリティとして中国社会の大海に漂ってきた彼らの「生き残り」を賭けた知的奮闘の過程を、それぞれ克明に描出することに成功している。また、直接的な言及はないものの、「ムスリム」や「中国人」とは誰のこと指すのか、そして「イスラーム」とは、「中国」「中華」とは何かという大きな問題に関しても重要な示唆を与えてくれるのである。

第二の魅力は、視覚的資料の駆使やコラムの充実に見られる構成の工夫である。たとえば、中国イスラーム文献や清真寺（モスク）をはじめとする写真の数々は、読者を視覚的イメージから中国ムスリム社会の日常に誘う役割を果たしている。また、各章のコラムは、中国イスラームを通史的かつ多角的に理解するうえで有益な情報を数多く提供するものであり、特筆に値する。

ところで、本書が第三五回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）を受賞した際、評者の一人をして、今後二〇〇年は読み継がれていく作品だと言わしめたという。本書は、本邦初とも言える体系的な中国イスラーム思想史の専門書としてのみならず、文明交流論の新しい古典としても広く参照され、その学術的意義を高く評価され続けるだろう。

菅原由美
『オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動―写本に見る一九世紀インドネシアのイスラーム潮流』
大阪大学出版会、二〇一三年

山口　元樹
慶應大学大学院文学研究科
博士課程

本書は、一九世紀中葉に起こったイスラームに基づく抵抗運動を事例に、オランダによる植民地支配の進行によって変容しつつあったインドネシアのジャワ社会を分析したものである。具体的には、中部ジャワ北海岸プカロンガン理事州のカリサラック村から広まったアフマッド・リファイによる運動が取り上げられている。リファイはアラビア文字表記のジャワ語でイスラームに関する書物を執筆した最初期の人物であり、植民地政庁に従う現地人官吏を批判したことで知られる。本書は、リファイ運動を、当時の社会状況を考慮した上で、リファイ、現地人官吏、植民地政庁という複数の観点から多義的に解釈することを試みている。

このアプローチに関して特筆すべき点は二つある。第一に、従来の研究では植民地政庁に阿った受動的存在として等閑視されてきた現地人官吏の視点を取り入れていることである。彼らと植民地政庁との関係が、実際にはそれほど単純なものではなかったことが明らかにされている。第二に、運動参加者の言説を検討するために、

オランダ語史料のみではなく、これまで看過されてきた現地語の史料も駆使していることである。著者は分析の結果から、リファイ運動が植民地支配者と宗教指導者間の単純な政治対立ではなく、その背景に「前世紀から徐々に蓄積され一九世紀において加速したイスラーム化の新たな潮流」があったことを指摘している。

個人的に残念な点として、リファイの著作を丹念に読み込んでいるにも拘らず、彼のイスラーム思想がそれほど深く分析されていないことがあげられる。しかし、一九世紀のインドネシアにおけるイスラーム運動を扱った研究は日本語では非常に手薄であり、本書が出版された意義は大きい。資料編として、現存する最も古いリファイの著作『シャリフル・イマン』のローマ字翻字が付けられており、今後の活用が望まれる。

鈴木恵美
『エジプト革命―軍とムスリム同胞団、そして若者たち』
中公新書、二〇一三年

竹村　和朗
東京大学大学院総合文化研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員（DC）

二〇一一年革命後のエジプト政治の道程は、しばしば「混迷」の語で言い表される。二〇一三年は、前年末の新憲法制定により少しは落ち着くと思われたが、年の半ばにムルシー大統領が解任される事件が起き、それに抵抗する政権支持者の座り込みの強制排除などが連鎖的に生じた。著者はこの流血の「惨事」を目の当たりにして、権威主義体制の打倒を目指した革命がなぜこのような結末に帰着したのかと問いかける。革命後、「これまで以上に頻繁に現地に足を運び」、「体制移行期をエジプトの人々と共に歩んだ思いがある」という著者にとって、この帰結は「混迷」の一語では言い尽くせないものであったのだろう。

この熱い思いを秘めながら、著者は冷静かつ客観的な事実を積み重ねていく。本書の最大の焦点は、「軍」である。革命当初から、軍はきわめて重要な政治アクターであったが、その詳細はむしろ不問に付されてきた。著者は果敢にも、この最大のタブーを取り上げ、多年にわたる現地調査と様々な媒体の資料をもとに、軍の行動とその役割を委細に論じている。

本書は全八章から構成され、各章はほぼ時系列に沿って区切られる。第一章「革命のうねり」では、ムバーラク辞任までの一八日間のあらましとその「クーデター的な側面」が明かされる。第二章「将校たちの共和国」では、軍を軸としたエジプト現代史の再読が提示される。第三章「自由の謳歌」では、革命直後の昂揚期と軍主導の民主化プロセスが論じられる。第四章「ポスト・ムバーラク体制の土台作り」では、革命後に登場した政治アクターの見取り図が提示される。第五章「未来を模索する青年勢力」では、自他ともに認める革命の先導者たる「若者たち」が政党政治の流れに乗れず、次第に政治の周辺に追いやられていく姿が描き出される。

第六章以降は、一騎打ちとなった軍とムスリム同胞団の権力争いを軸とする。第六章「軍とムスリム同胞団」では、二〇一一年五月の同胞団政治部門たる「自由公正党」の結成からその一年後の大統領選に至る、公の舞台における権力争いの諸相が示される。第七章「ムスリム同胞団の夢と現実」では、二〇一二年六月のムルシー大統領就任から一年間の同胞団主体の政治運営が論じられる。そして第八章「民主化の挫折」では、二〇一三年六月の青年勢力による大統領辞任要求から七月の軍による解任、八月の強制排除までの顛末が述べられる。若者たちが自ら軍の介入を導いたことを、著者はエジプト型民主主義の模索における「つけ」と呼び、今後に大きな課題が残されたことを示唆して本書は締めくくられる。

エジプト革命の成り行きを理解するため、そして現代エジプトの政治・社会構成のあり方を探るための必読の一冊である。

三浦徹　編
『イスラームを学ぶ―史資料と検索法』
山川出版社、二〇一三年

長沼　秀幸
東京大学大学院人文社会系研究科
修士課程

本書は、イスラームを学ぶ際に必要となる文献への基本的なアクセス方法を紹介するものである。本書が想定している読者は、これからイスラーム地域を学ぼうと志す初学者である。以下では、全体で四章からなる本書の内容を各章ごとに紹介する。

第一章では、明治時代以降の日本におけるイスラーム研究の軌跡が概観される。ここでは、偏見に満ちた欧米のイスラーム観を克服したイスラームへの理解、そしてヨーロッパ諸言語で記された研究を経由せず、直接現地語にあたってイスラームへの理解を深めようとする、現代に至るまでの日本人研究者の気風が述べられる。第二章では、研究文献の検索方法が中心的に紹介されている。図書館の蔵書目録を使った古典的な手法から、インターネットの検索ツールを利用した検索方法まで詳しく述べられている。第三章は史料を中心に扱っている。クルアーンから始まる、イスラームにおける書物編纂の歴史を概観した上で、編纂された資史料の図書館などにおける組織化の歴史と現状、そして日本国内における現地語資料へのアクセスの仕方が紹介される。第四章では、イスラーム圏の現地語資料の入手方法が紹介されている。本章の前半は、現地の書店において直接書籍を入手する方法が紹介されている。ここでは、現代のアラブ世界における書店の現状が述べられており、現地に赴いたことのない者にとっては非常に面白い。後半では、写本および校訂本の作成過程、さらにはそれぞれの利点が説明されており、本部分は初学者でなくとも役に立つ内容となっている。以上の本論に加えて、本書では各章の話題に関連した合計四つのコラムがあり、読者を飽きさせないような工夫がなされている。

本書は、検索方法を列挙・説明するだけの単純なマニュアルではなく、資史料編纂の歴史や背景などを丁寧に示した点にそのオリジナリティおよび意義がある。イスラーム研究の初学者はぜひとも参照すべき文献であるといえよう。

東長靖
『イスラームとスーフィズム―神秘主義・聖者信仰・道徳』
名古屋大学出版会、二〇一三年

井口　亮太郎
青山学院大学文学研究科
博士後期課程

本書は、著者が個別に執筆してきた論文一七本が母体となっており、スーフィズムについて、その研究史と分析概念、スーフィズムの一側面である神秘主義哲学、とりわけ存在一性論、イスラームの聖者理解、またイスラームにおけるスーフィズムの位置付けについて四部構成で論じている。

著者は思想研究を専門としていたが、エジプト留学を通してスーフィズムの神秘主義思想に加え、民衆の中で実践されるスーフィズムや聖者信仰に目を向けることとなった。「数多くの神秘主義思想の一つ」としての「イスラーム神秘主義（スーフィズム）」ではなく、イスラーム世界の中のスーフィズムを研究の対象としており、その姿勢は本書にも反映されている。

表題にスーフィズムとあるが、多様性を持ち、かつ研究者の分野によってもスーフィーとされる対象は大きく異なる。それはおそらく、思想研究を専門としていた著者が留学先で日々実践されるスーフィズムに目を向けたときにも感じられたに違いない。この多様なスーフィズムについて思想研究を超えた文脈で扱うために、著者は「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象」（二一頁）という概念を提唱し、こ

れについて道徳、神秘主義、民間信仰の三軸からなる三次元グラフの分析概念を提示している。このユニークなモデルによって、時代、地域、あるいは研究者の専門分野によって異なるスーフィーへの理解を試みている。

存在一性論の是非を巡る一連の歴史展開を扱った論考の中で、著者は以下の三点について繰り返し主張している。

・スーフィズムは決して神秘主義のみによって特徴づけられるものではない。

・歴史の中で、スーフィズムはイスラームのマイノリティではなく、他のイスラームの理念と相容れないものでもなかった。

・ウラマーがスーフィー思想に長じていることも多く、ウラマーがスーフィーを批判することはあっても、スーフィズムの存在そのものを否定することは極めて稀であった。

またこのように歴史的背景を深く掘り下げることにより、現在のイスラームとスーフィズムの動向が浮き彫りにされていることは特筆に値する。

本書は、専門とする時代地域・分野に関わらず、スーフィズム研究を志す方には是非ご一読いただきたい刺激的なものである。

深見奈緒子『イスラーム建築の世界史』（岩波セミナーブックス）岩波書店、二〇一三年

山田　協太
京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科　助教

本書は、イスラーム以前から説き起こしながら、現代までイスラーム建築の通史を描こうとした類のない本である。と同時に、イスラーム建築を従来の建築史の中に、位置づけようと試みた点が新しい。

一章から五章では、紀元七〇〇年以前から一七五〇年までの、広域に建設された多数の作品を扱い、イスラーム建築史の教科書ともいえる書籍である。周囲の建築文化と比較し、イスラーム建築を位置づけるそれぞれの最終節は興味深い。

一転、六章と七章では、イスラーム建築という枠組み自体が、一八世紀のヨーロッパの異国風建築の建設活動と、建築史興隆に帰すと指摘する。そして、二一世紀にはイスラーム建築を抜け出す新たな枠組みを目指すべきだと主張する。そのために、モノ・人・情報の通り道とその拠点に注目することが必要で、手始めとしてインド洋周域を考えてみたいと新たな目標を設定する。さらに、新しい世界建築史を考えていくべきだと述べる。

著者の考える世界建築史は、基本的には動くことのできない建築の中に閉じ込められた文化交流の痕跡を見出すことなのであろうか。そうだとすると宗教としてのイスラームは建築文化に何を残したのであろうか。また、七章で指摘するような現代の湾岸やメッカで起こっている現代的建設活動は、イスラームと結びつくものなのだろうか。

一九世紀の建築史が、建設活動を支えるものとして必要だったならば、著者が考える新しい世界建築史は、何のために必要なのだろう。新しい建築史が、現代の建築文化の反省の契機となり、またその創造性を刺激する存在となることを期待する。

砂井紫里『食卓から覗く中華世界とイスラーム―福建のフィールドノートから』めこん、二〇一三年

澤井　充生
首都大学東京都市教養学部　助教

本書は、中国福建省晋江市陳埭にくらす回族の「食事」をめぐる民族誌である。著者は、日常生活における「食事」をコミュニケーションの一つのあり方と考え、中国の社会関係、民族、宗教、地域のあり方に

ついて考察している。フィールドワークについては、著者は一九九七年から二〇一一年にかけて福建省晋江市を中心として断続的に実施し、清真寺（モスク）の宗教指導者や学生、地元の回族や他省からきたムスリム（回族、ウイグル、外国人ムスリムなど）に対してインタビュー調査を積極的に行っている。

本書は三章構成である。「第一章　食事を考える枠組み」では分析枠組みが人類学的な知見をもとに整理され、「食事」のコミュニケーションとしての側面が注目される。「食事」は単なる飲食行為であるだけでなく、そこに暮らす人々の自然環境、社会環境、政治状況、経済状況、さらには情動や記憶とも深く関わる社会的行為であり、「食事」の一場面一場面を綿密に記述することの意義が説かれている。「第二章　食事の背景」では、伝統中国の薬膳の思想（「熱い食べ物／冷たい食べ物」）、イスラームの食の規範（「ハラール／ハラーム」）、市場の様子、調味料・調理道具・台所風景などが簡潔に紹介されている。「第三章　食の風景」では、家族の食事風景、清真寺や祠堂での食事、レストランでの外食などの食事行為が緻密に記述されていて興味深い。

本書の全体を通じて、ハラールではない中華料理、回族のハラール料理、西洋式のファストフードなどのような異なる食文化が地元回族の間では特に矛盾することなく消費されている様子が生き生きと描かれている。個人的には、豚肉が地元回族の間では特に違和感なく食されている場面には驚いたのだが、それが慣習化された歴史的背景や他地域（例えば西北）の回族との相違点などにも言及すると、調査地の地域的特性が際立ったかもしれない。とはいえ、本書は中国の回族の現状を知るための貴重な民族誌である。

ジョナサン・バーキー（野元晋、太田絵里奈訳）
『イスラームの形成―宗教的アイデンティティーと権威の変遷』
慶應義塾大学出版会、二〇一三年

野口　舞子
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
博士後期課程

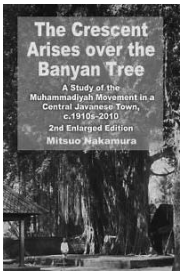
本書は、中世イスラーム社会史を専門とするジョナサン・P・バーキーの著書*The Formation of Islam: Religion and Society in the Near East, 600-1800*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003の翻訳である。副題にあるように、宗教的なアイデンティティーと権威の変遷に焦点を当て、イスラームの出現とその初期の発展を通史的にたどる。原副題は「六〇〇年から一八〇〇年における近東の宗教と社会」だが、議論の実態に即し、日本語版では時代設定が外された。

本書では、まず近東とアラビア半島における古代末期からイスラーム成立までのおよそ一〇〇〇年間を、近代まで存続した宗教的伝統が明確化した時代として（第Ⅰ部）、続く六〇〇年から七五〇年を、イスラームの宗教的アイデンティティーが古代の文化的・宗教的発展を継承しつつ現れる時代として描く（第Ⅱ部）。七五〇年から一〇〇〇年は、アッバース朝において、このアイデンティティーが確立する時代である（第Ⅲ部）。一〇〇〇年から一五〇〇年までの「中期」は、カリフ権の弱体化と軍事政権の誕生という政治的分裂状態の時代であり、宗教的権威の所在をめぐり諸勢力がせめぎ合う、この状態こそがイスラームの発展と宗教生活の多様性を生み出した（第Ⅳ部）。イスラームの出現は独立した出来事ではなく、先行する宗教伝統の展開や近東の人びとの歴史と関係づけることで理解でき、明確な信仰となった後も、数世紀にわたり伸張と発展を続けたのである。

著者の研究成果が凝縮された、宗教的知識の伝達やスーフィズムの拡大、民間信仰の議論は独創性に富み、中期近東におけるイスラームの宗教文化の複雑性や流動的な形態が浮かび上がる。多様な集団の相互関係と社会の結びつきによって、イスラームが形成される過程をダイナミックに描く本書は多くの読者を惹きつけるだろう。有益な訳者解説や日本語文献案内も充実した日本語版が出版されたことは大きな意義をも

つといえる。

外国図書



Nakamura Mitsuo, *The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town c. 1910-2010*, Singapore: ISEAS, 2012.

土佐林　慶太
早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

本書は、著者が一九七六年にコーネル大学へ提出した博士論文をもとに、一九八三年にガジャマダ大学出版会から刊行された同名著作（ただし、初版の副題は*A Study of the Development of Muhammadiyah in a Central Javanese Town*である）の増補改訂版である。インドネシア最大の改革派イスラーム団体であるムハマディヤを分析対象として、著者の長年にわたる参与観察、聞き取り調査、公文書調査の成果が、その分析に活用されている。

本書は二部、一四章で構成されている。第一部は、ムハマディヤが設立された一九一〇年代から一九七二年までを綴った初版の内容に、最小限の修正を加えたものが、再録されている。一九七〇年代初めに、著者が約一年半にわたりフィールド調査を行った、コタグデ（中部ジャワ、ジョグジャカルタ市内の町名）における、ムハマディヤ運動の発展に力点を置き、いわゆるイスラーム改革主義運動が同地の人々の生活に浸透していく事例を提示する。

第二部は、著者の最新の研究による書き下ろしである。初版で著者が提示した仮説の再確認を出発点として、その後（一九七二―二〇一〇年）、インドネシア社会で起きた急速な変化と人々の価値観の多様化により、ムハマディヤ運動が現在進行形で直面している問題について、「イデオロギー的」、「社会的」、「経済的」側面から考察がなされる。最後にこうした分析を通して、著者は、ムハマディヤの未来についても言及している。

本書が出版された二〇一二年には、インドネシア各地の大学で、著者を招いた出版記念セミナーが開催されるなど、現地での本書に対する関心は非常に高いものとなっている。本書は、ムハマディヤ設立期から現在までの約一〇〇年を、通史的かつテーマ横断的に考察した、インドネシアのイスラーム研究に関する第一級の研究書である。同時に、四〇年以上にわたって同地を訪れ、その変化を見続けてきた著者による、インドネシアの社会変容を扱う研究としても非常に価値が高く、近現代インドネシア史を学ぶ者にとって、必読の書と言えるだろう。

Yücel Hacaloğlu, *Atsız'ın Mektupları*, 2. basım, İstanbul: Ötüken, 2013.（ユジェル・ハジャルオール『アトスズ書簡集』第二版、イスタンブル、二〇一三年）

小野　亮介
慶應大学大学院文学研究科
後期博士課程

ヒュセイン・ニハール・アトスズ（一九〇五―七五）はトルコ共和国を代表するナショナリストとして記憶され、トルコ人の血統の偉大さを説く彼の人種主義的民族主義は今なお多くの人々を惹きつけている。『灰色の狼の死』、『魂の人間』などの著書は版を重ね続けているが、この種の思想研究・個人研究では書簡もまた重要な手掛かりとなりうる。

本書は編者自身を含む三〇余名にアトスズが宛てた書簡を収めている。一九四三年から亡くなる一週間前までの書簡約二八〇点のうち、八割近くが一九七〇年以降のもので、「書簡によるクーデタ」（一九七一年）以降のトルコの政治的・社会的雰囲気が生々しく描写される。また彼が主宰していた『オテュケン』誌やトルコ史に関する

様々なテーマも語られている。

第二版では新たに約六〇点が加えられたがその大半は、当時ミュンヘンのラジオ・リバティに勤務していた新疆出身のカザフ人、ハサン・オラルタイ宛のものである（その存在を評者は人づてに編者に伝えた）。アトスズはトルコの状況をオラルタイに語るが、とりわけ一九七二年にイノニュが共和人民党総裁辞任に追い込まれたことや、後継のエジェヴィトによる党の「中道左派」化を露骨に批判している点は興味深い。イノニュに対する罵倒は、一九四四―四五年の「人種主義・トゥラン主義裁判事件」によるアトスズの怨恨の深さを物語っている。

昨年夏アンカラに編者を訪ねた際、彼は「出版を通じて、歴史的価値のある資料の散逸を防ぐことが出来る」と評者に語ってくれた。彼にとって第二版はまだ不十分であり、既に第三版刊行の意欲があるという。編者はプロの研究者ではなく、注がやや簡潔すぎる点は気になるが、彼のような熱意ある人々もトルコ史研究を担う一翼であることを忘れてはならないだろう。

Ferman Bayır (ed.), *Gezi Direnişi: En Özel Fotoğraflarla*, İstanbul: Kaynak, 2013.（フェルマン・バユル

編『ゲズィ・レジスタンス：最も特別な写真』、イスタンブル、二〇一三年）

小野　亮介
慶応大学大学院文学研究科
後期博士課程

イスタンブル・タクスィム広場に接するゲズィ公園の樹木伐採に端を発した市民の抗議は、二〇一三年五月二七日に始まった時点では取るに足らないものだった。しかし放水や催涙ガスによって抑え込もうとする警察の様子がインターネットを通じて拡散されると、デモ（彼ら自身はしばしば「革命」と呼んだ）は急速に拡大し、アンカラやイズミルなど他都市にも波及した。世界中が注目したデモ参加者と警察との対峙は六月中旬まで続いた。やがてデモは沈静化したが、以後も散発的に発生した。

デモとは一体何だったのか。彼らは何に怒り、何を訴えたのか。こうした問いに対し、写真は活字よりも雄弁である。本書は一〇のテーマ：警察、デモ行進、風刺、自然への愛、スプレー落書き、テレビメディアへの不信、参加者たち、支援者たち、お祭り気分、そして犠牲者をデモ側の立場から捉えた一五九枚の写真を収めている。その中でもとくに印象的だったものをいくつかを紹介しよう。

まず目につくのは、デモ参加者の中心が青年層であり、一〇代後半の参加者も少なくないことである。その多くが一九八〇年クーデタ以前のトルコの閉塞的社会状況を直接経験しないまま育ち、現政権に不満を抱いている世代ともいえる。デモには世俗主義者か否か、社会主義者か民族主義者かを問わず、様々な人々が参加した。彼らの主張もまちまちだが、なかには政府の対米追従の姿勢を批判するフレーズも見られる。前年に『タイム』誌の表紙を飾ったエルドアン首相の写真は、コラージュによってヒトラーに擬せられた。エーゲ海のスキューバダイバーたちは海中で、催涙ガスはここでは効かないぞという皮肉の効いたメッセージを掲げている。

評者としては、強力なデモ指導体制の欠如を、デモが終息に向かった要因の一つに挙げたい。しかし、こうしたデモ参加者の多様性やそれに応じた様々な批判、そして彼らが共有した憤りこそ、トルコの今を象徴するものではないだろうか。